

〈論文〉

## 死後世界の体感 ——聴こえない音を語る——

北 沢 裕

はじめに——学生アンケートにみる「あの世のイメージ」

以前、筆者の講義を受講している大学生に対して「死後世界のイメージ」についてアンケートを取ったことがある（東洋英和女学院大学、東京理科大学、武蔵野美術大学で実施）。回答の典型例はつぎのようなものであった。

「何もない静かな無の世界。」「モノクロです。音はしません。」「光に包まれているイメージがあります。」「白黒。無音なイメージ。」「生も死もなくまったく無音の世界が広がっている。」「テレビを消すように静かで真っ暗です。」「表現するとしたら、無音な少し安らかな感じがする。すごく静かだと思う。」

このように、「無」、「モノクロ」、「無音」のイメージの強さが際だっていることが特徴的である。つまり、現代の死後世界イメージは、まずもって無のイメージであり、それをあえて言語化した時、きわめて抽象的で空漠なイメージに収斂しているように思われる。また、視覚イメージが聴覚イメージに優っている点も看取されるが、これは後に見るように、現代の臨死体験にも共通している特徴である。

この「死後世界」の音の想像しがたさは何を意味するのであろうか。本稿では死と死後世界の音について、過去と現在の「死後世界の音」の表現を参照しながら考察したい。

### 1. 15、6世紀の天国と地獄の音

中世後期の西欧社会は度重なる戦乱とペストの猛威とに曝された。その結

果、現世を蔑し来世を希求するメメント・モリの思想が広まり、死を巡るさまざまな表象が数多く成立することとなる。そこには死後世界の音の表現も見いだすことができる。北方ルネサンスの画家、ハンス・メムリンク（1430/35-1494）とヒエロニムス・ボス（1450頃-1516）は対照的な来世の音を描いている。

メムリンクの三連祭壇画「最後の審判」（図1）は、再臨したキリストのもと、大天使ミカエルによって秤量され、左右に振り分けられる死者たちが描かれる。左翼パネルには、天国に招かれる義なる死者たちが描かれている。天国は地上における神の国であるゴシック聖堂として描かれ、その入口では使徒ペテロと天使たちが義人たちを迎えている。聖堂の上部には天使の楽隊が揃い、フルート、リュート、ヴィオラ・ダ・ガンバ、ハーブ、ハンドベル等を奏でている。聖歌を歌う天使の合唱隊もいる（図2）。天国はゴシック聖堂の荘厳な視覚イメージと、天使の楽隊の奏でるハーモニー（和音）の聴覚イメージに満ちている。

一方、ボスの三連祭壇画「快楽の園」（図3）の右翼パネルには「音楽地獄」（図4、5）が描かれている。この作品は、左翼パネルの「エデンの園」



図1 ハンス・メムリンク「最後の審判」1473年以前、グダニスク、ボモルスキ美術館。



図2 メムリンク「最後の審判」左翼パネル部分。

に始まり、中央パネルの快樂・罪に満ちた「現世」を経て、快樂・罪の報いとして右翼パネル「地獄」に堕ちる人間の罪と罰の定めをテーマとしているが、その描写はキリスト教図像の定型から大きく逸脱している。特に地獄の描写には中世に流布した説話文学である「トゥヌグダールの幻視」のモチーフ（罪



図3 ヒエロニムス・ボス「快樂の園」1500-1510年、マドリッド、プラド美術館。



図4 ボス「快樂の園」右翼パネル部分。



図5 ボス「快樂の園」右翼パネル部分。

人を飲み込む鳥頭の怪物など）を見いだすことができる（神原 1997: 176-178）。

12世紀に記述されたこの「トゥヌグダルス（トウヌグダルス）の幻視」は、主人公のアイランド人騎士トゥヌグダルスが、宴席で仮死状態になり4日後に蘇生するまでの間、守護天使に導かれて死後世界の様々な責め苦の場所、地獄の入り口、楽園などを巡歴する物語（死後世界旅行記）である。この種の物語の中で最も読まれた作品であり、その死後世界の像は広く影響を及ぼすものとなり、ダンテの『神曲』にも直接的な影響を与えている（Gardiner 1989: 149-195、Morgan 1990、北沢 2009: 60-63）。例えば15世紀のランブール兄弟（1399頃-1416頃活動）による「ペリー公のいとも豪華なる時祷書」中にも「トゥヌグダルス（トウヌグダルス）の幻視」に基づく地獄の入り口とルシフェルの情景が描かれている（図6）。地獄の入り口は地獄の業火が吹き出しているバーベキューグリルのような井戸であり、その上にルシフェルが横たわり、



図6 地獄の入り口とルシフェル。ランブール兄弟『ペリー公のいとも豪華なる時祷書』1411-1416年頃、シャンティイ、コンデ美術館（Ms. 65, fol. 108v）。

死者の靈魂を驚嘆みにしながら自らの口からも火を吐き出し死者の靈魂を吹き上げている。井戸の周りにはルシフェルの眷属らが巨大な轡を踏んで火の勢いを増している。そこからは炎と轡のたてる荒々しい音の中から、握り潰され、際限なく炎に焼かれる哀れな死者達の泣き叫ぶ声が聴こえてくるようである。

ボスの「地獄」では、火災に包まれる夜の町を背景に、地獄に堕ちた人間を拷問具となって苦しめるさまざまな楽器（ハープ、リュート、ハーディー・ガーディー、ドラム、フルートなど）が描かれている。中央の樹木人間の頭には肉欲を表すバ

グパイブが載せられており、そのそばには刃を突き出し針に貫かれた巨大な耳が並ぶ（神原 2000: 136-167）。メムリンクの描いた天国のハーモニーのイメージに対して、ボスが描いたのは地獄の騒擾空間のなかで奏でられる雑多な楽器の狂った音の世界であった。和音と不協和音の対比は天国と地獄の位相に合致し、それは人間が抱く死後世界への期待と不安に重なっているとみることもできるだろう。西欧中世後期には、このように「秩序」と「無秩序」とに対照化された死後世界の音が想像されていたのである。

## 2. ケルトの他界の音

死後世界旅行記「トゥヌグダルの幻視」は、キリスト教の死後と審判に関する教義と、民衆文化、特にアイルランド・ケルト文化の他界イメージとが融合した物語といえることができる。では、ケルトの他界観の系譜には、そもそもどのような「音」が見いだされていたのだろうか。

ケルト民族には強い他界への憧憬が存在していたと考えられる。海上他界訪問譚である「イムラマ *imram* (*immram*)」文学の伝統はそのあらわれであり、現代のファンタジーを代表する C. S. ルイスの『ナルニア国物語』や J. R. R. トールキンの『指輪物語』の重要なモチーフとなっていることにも、その命脈の強さが確認される。ナルニア国年代記第 4 巻の『朝びらき丸東の海へ』は海の彼方の楽園である「アスランの国」を目指すナルニア版イムラマであり、『指輪物語』の結びは海の涯ての他界への旅立ちというイムラマの伝統を踏襲したものになっている（北沢 2007: 91-93）。

文字化されたイムラマの歴史は 8 世紀の「ブランの船旅」に遡る。ケルト版の「浦島太郎」ともいうべきこの物語の内容は以下のようなものである。

フェヴァル王の息子ブランはある日、見慣れぬ服装をした乙女の歌に導かれ、不老不死の「エヴナの国」を求めて仲間とともに船出する。海神マナナーン・マック・リルとの出会いや、住人たちが絶え間なく笑い続ける「喜びの島」を経て、一行は「女人の国（エヴナの国）」を発見する。そこは夢のような国だったが、望郷の念ゆえにブランらはアイルランドへ帰る決意をする。彼らが出発する際、女王はブランに「喜びの島」に置き去りにした仲間を連れ帰るよう、そして決して陸地に足を触れてはならないと忠告する。

しかし彼らが船出した元の場所まで戻ってきたとき、思わず船から飛び下りてしまった者の足が地面に付いた途端、その体は灰になってしまった。ブランは岸にいる人々に自分がフェヴァルの息子ブランであることを告げ、誰か自分を知るものはいないかと尋ねたが、誰も知らない。ブラン達が1年ぐらいと思っていた航海の間に、実際には何百年もの時がたってしまったことを悟り、ブランら一行は岸の人々に航海の一部始終を語った後、別れを告げて再び海の彼方へ去っていく（松村 1991: 169-187）。

ブランら一行の旅立ちのきっかけとなったのは不思議な乙女の歌の誘いである。

一群の者たちが澄んだ海を越え、船を漕いでかの地にやってくる。  
百の旋律があふれ出る異彩を放つ岩に向かって彼らは漕ぐ。  
それは幾世にわたり共に歌う。その調べは幾百もの合唱で昂まり、彼らは衰えも死も知ることはない。  
近くでも遠くでも、海ぎわの多様な形をしたエヴナ。色とりどりに着飾った幾千もの女がいて、その地は清澄な海で囲まれている。  
.....

怠惰の床に寝てはならない、酒の酔いに負けてはならない、船出せよ、澄み切った海に向かって。あなたは「女人の国」に辿り着くであろう。  
（松村 1991: 178）

ブランらがたどり着いた他界は「百の旋律があふれ出る異彩を放つ岩の島」であり、その住人は「幾世にわたり共に歌う。その調べは幾百もの合唱で昂まり、彼らは衰えも死も知ることはない」という。ケルトの他界はこのように時間を超越した世界であり、そこにはしばしば不思議な歌が伴う。音楽は現世と他界の境界と位置づけられているとも考えられる。

ケルト世界がキリスト教化されていく中で、イムラマもキリスト教的変成を遂げていく。写本数が最も多く、広く流布したことが知られる12世紀の「聖ブレンダンの航海」はその典型である。

アイルランド、ゴールウェイ地方のクロンファートで修道院長を務めていた聖ブレンダンのもとに1人の修道士が訪れ、西の海中にある聖人たちの「約束の地」に行くよう勧める。聖ブレンダンは選ばれた17人の修道士と

ともに船を作って漕ぎ出し、幾度も漂流を繰り返しながら、7年にわたる旅を続けることになる。その中で一行は様々な怪異に満ちた島や不思議な生き物を目撃する。島だと思っていたが実は巨大な魚だった「ヤコニウス」、人の靈魂が白い鳥の姿で集っている「鳥の樂園」、グリフォンなどの怪鳥たち、巨大な果物でおおわれた「ブドウの島」、海から突き出した巨大な水晶の柱、地獄の淵とされる「鍛冶屋の島」などを遍歴した後、ついに「約束の地」である「地上の樂園」にたどり着く。そこから一行は無事にアイルランドに帰還し、この不思議な旅の様子を物語ったという (Gardiner 1989: 81-127、田中 1995: 124-153、松岡 1999: 117-140、Barron & Burgess 2005)。

さまざまな驚異が語られる中でも「鳥の樂園」の物語はまさに死後世界の音に関わるものである。

ブレンダンが問いかけると、一羽の鳥が「翼でハンドベルのような音をたてながら」降りてきて、「私たちはルシフェルが謀反をおこしたときに破壊された魂なのですが、彼と罪をともにしているわけではありません、」と言う。そして自分たちは日々さまよっているが「……聖日と日曜日にはあなたがいま眼にしているような身体を与えられて、この島にとどまり、私たちの創造者を褒め称えるのです」と説明する。やがて晩祷の時間がくると、すべての鳥たちは一緒になって「死者のためのミサ」で歌われる「主よ、シオンの町ではあなたに賛歌が捧げられ (*Te decet hymnus, Deus, in Sion*)」を1時間ほど歌い続けた。同じようにして、8つの「聖務日課」(修道院で毎日行われる祈りの時間)の時には、鳥たちはそれぞれにふさわしい詩篇と聖書の句とを歌った (Gardiner 1989: 104-105、ゴドウィン 1990: 83)。

このように「聖ブレンダンの航海」においてケルトの他界と怪異はキリスト教の神話と教義に接続され、その文脈で解釈され説明される。他界の境界を示す不思議な歌は、不思議な神の御業へと変成させられている。

聖ブレンダン一行はこのような驚異的事物との遭遇を経て樂園に到達するのであるが、この樂園は人類の祖であるアダムとエヴァが追放された「地上の樂園」である。またこの「地上の樂園」の手前には地獄の淵に位置する「鍛冶屋の島」が存在していた。「鍛冶屋の島」は炎と黒煙に包まれた場所で、そこでは悪魔達が鍛冶屋のようにさかんに鉄を鍛えている。聖ブレンダン一行は悪魔達が投げつける焼けた鉄塊を避けて進まねばならなかった。一方、「地上の樂園」の島は厚い霧の中に位置し、無数の宝石がちりばめられた高

い城壁で囲まれている。城壁の彼方には大理石の山脈が連なりさらにその向こうには純金の山が聳え、その頂をもう一つの城壁が囲んでいる。この山上の城壁の中は花が咲き乱れ、果実がたわわに実る常夏の楽園であった。聖ブレンダンら一行は神の使者である若者にこの楽園を案内されるが、その高い丘のさらに上には天上の栄光に満ちた場所があり、そこからは天使の歌声が聴こえていた (Gardiner 1989: 115-116)。

このように文字化されたイムラマにおいては、ケルトの海上他界はキリスト教の天国と地獄に編成し直された場となる。そしてここにも、地獄の悪魔達の鍛冶の音と、楽園上部からの天使の歌声という対照的な音が響きあっている状態が見いだされるのである。

J. ゴドウィンはこの物語の音楽に注目し、聖ブレンダンが7年かけておこなった「約束の地」にむけての航海は、7つの天球を通る旅のアナロジーとみるべきであると指摘している (ゴドウィン 1990: 90)。この「天球を通る旅」とはどのような意味をもつのだろうか。死後世界の音の歴史はさらに古い伝統に接続していく。

### 3. プラトン「エルの夢」と天球の音楽

中世の死後世界の「音」の表現を見ると、興味深いことに、天国の理想的な音は美しく壮麗な調べや歌声と語られるもののその実際の響きは想像しがたく、地上の神の国たる聖堂の音楽の延長としてかろうじて想像されるばかりであるのに対し、ボスやランブール兄弟、あるいは「聖ブレンダンの航海」が描く地獄の轟音のイメージはより明瞭に感じられる。地獄に対する想像力の豊かさに比して、天国に対するそれが曖昧であるのは世界の死後世界に共通する特徴であるが、こと音に関して、その特徴は強く表れているように思われる。そしてその背景には、西欧中世文化に先立つ、ある「音」のイメージが強く反映している。それがピュタゴラス派が想定した「天球の音楽」である。プラトンの「エルの夢」はこの音の像を具体的に描いている。

プラトンの対話篇ではいくつかの死後世界の物語 (ミュートス) が語られている。これらの物語はおそらく間接的に中世の死後世界旅行記にも影響を及ぼしていると想像される。『国家』の最後には特に充実した死後世界旅行記がおかれている。「エルの夢」と呼ばれるこの物語は、戦場で斃れたアル



メニオス王の王子エルが、12 日後に蘇生しその間の経験を語ったものである。

エルによれば、死者（の靈魂）は牧場で裁判を受け、正しき者は右手の天への道を上るように、悪しき者は左手の地下への道を下っていくように振り分けられる。天に向かった者は褒賞を与えられるが、地下に向かった者は「ざらざらと燃えるような形相の猛々しい者ども」に迎えられ、鞭や茨で責め苛まれる。死者は 1000 年に亘って褒美と罰とを受けた後、元の牧場に帰還し、お互いの経験を語り合う。その後、死者は牧場から移動し、必然の女神アナнкеがすべての天球を回転させている「紡錘」を支え、娘の運命の女神達（モイライ）がその回転を助けている場所へと進む。ここで死者達は籤引きで順番を決めた後、自分の次の生を、人間だけでなく動物などを含めたありとあらゆる生の見本を吟味して、自ら選択しなければならない。プラトンはここでオルフェウスやオデュッセウスら英雄達を登場させ、この選択が各人の良識だけでなく、過去の生の経験にも左右されているさまを描く。次の生を選択し、運命の女神達にそれを靈魂に定められた死者達は、この場から炎熱のレーテー（忘却）の野に進む。そこに流れるアメレース（放念）の河の水を飲んで一切の記憶を忘却したのち、死者は再生すべく流星のように上方へ飛び去ってゆく。しかしエルだけは実際には死んでいなかったため、火葬用の薪の上で蘇生する（プラトン 1976: 740-758）。

エルが経験した死後世界には不思議な音楽が流れている。アナнкеが支える紡錘のはずみ車（独楽の部分）の内部には同心円上の惑星軌道が収められているのだが、「紡錘はアナнкеの女神の膝のなかで回転している。そのひとつひとつの輪の上にはセイレンが乗っていて、いっしょにめぐり運ばれながら、一つの声、一つの高さの音を発していた。全部で八つのこれらの声は、互いに協和し合って、単一の音階を構成している」のである。

この死後世界に響く協和する音こそが、ピュタゴラス派が想定した「天球の音楽」だと考えられている（プラトン 1976: 749 補注 2）。「天球の音楽」とは、地球を中心に惑星と恒星とが天球をめぐる時に発する調和した音である。その音には宇宙<sup>コスモス</sup>=秩序の有り様がそのまま反映されている。それは常に鳴り響いているが、にもかかわらず容易には聴き取ることができない音とされる。そしてこの宇宙の調和の音の探求から生み出されるのが、「ピュタゴラス音階」である。

ピュタゴラス音階は倍音（完全5度）の積み重ねで音階を形成する。たとえば、ド（C）が出る弦の長さを2/3にするとソ、1/2にするとオクターブ上のドが出るが見いだされる。つまり、美しい整数比で美しい和音もたらされることが証明される。オクターブ上は「同じ音」とすれば5度をもっとも重要な調和関係となる。そして、

①ドが出る弦を1/2にすると1オクターブ高い音（ド）が出る。

②ドが出る弦を2/3にすると5度高い音（ソ）で出る。

③逆に、ドが出る弦を倍にすればオクターブ下のド、3/2にすれば5度低い音（ファ）が出る。

この論理の積み重ねで音階<sup>スケール</sup>が得られることとなる。つまり、5度上を得る作業とオクターブ下を得る作業とを重ねていくと、ソの5度上＝レ、レの5度上＝ラ、ラの5度上＝ミ、ミの5度上＝シも簡単に得られ、以上によりドレミファソラシドのハ長調のスケールが得られることとなる。さらに同じ作業を重ねていくと、最初に得られたド／ソ／ファとその後得られたレ／ラ／ミ／シに続いて、ファ＃／ド＃＝レ♭／ラ♭／ミ♭／シ♭／（ファ／ド）も得られ、これにより12音がすべて得られることになる。これがピュタゴラス音階である（しかし実際にはこうして得られる最後の「ド」は最初の「ド」に対する完全なオクターブ上にならず、ずれの問題が生じることや、3度の和音の重要性の問題があるため、後に純正律や平均律が成立することになる）（ファーガソン 2011、後藤 2010、小方 2012）。

ピュタゴラス派が美しい整数比から導き出した音階は、天球の音楽を地上で捉えんとするものと思われる。「エルの夢」では月から始まる7つの惑星とより遠くに見える恒星とが成す8層の天球に乗る8人のセイレンが「天球の音楽」の協和音を生み出しているが、これはまさに宇宙<sup>コスモス</sup>＝秩序<sup>モス</sup>の調和そのものである。この、地上では容易に聴くことができない不思議な、しかし完全に調和した「天球の音楽」の響きが常に満ちあふれているのがプラトンの描いた死後世界なのである。

#### 4. 音階<sup>スケール</sup>／階梯<sup>ステール</sup>と楽園への旅

神の国の音の最大のイメージ源がピュタゴラス派の「天球の音楽」であるなら、それはそもそも聴き取れないものであり、そしてそれを聴き取り再現

しようとする努力がピュタゴラス派以降の西洋音楽史を長く動かしてきたと考えられよう。そして美しい音の音階<sup>スケール</sup>と天球の階層を上へ上へと登る梯子のイメージの一致は、以後、死後世界への旅のモチーフと不可分に展開してゆくこととなる。この天と音楽のハルモニア（調和）の探求の歴史は古代ギリシアからダンテの『神曲』へと連なっていく。そしてその精緻な探求は続けられ、やがてケプラーの惑星運動法則（1617年）にもつながっていく（ゴドウィン 1990: 227-232）。

そして「聖ブレンダンの航海」の天使の音楽の表現は、この「死後世界の音＝天球の音楽」の探求の系譜にケルト的他界の系譜が複合したものとみることができよう。「聖ブレンダンの航海」の物語には古いイムラマの伝統とケルト系のアイルランド人修道士の伝道活動という歴史的事実が複合している（盛 1991: 288-323; 1996: 58-67）。盛節子は、アイルランド修道院文化の根底に「信仰表現の規範として集約されて、歴史と諸著作に「彷徨するアイルランド人」を刻んだ「救いと巡礼」の霊性」が一貫して流れていると指摘する（盛 1996: 37）。「聖ブレンダンの航海」の根底にあるのは、まさにその巡歴と旅の霊性である。そこでは、「天球の音楽」やキリスト教の正統教義、あるいは後の『神曲』の宇宙観（図7）に見られる垂直の上昇のイメージに対して、涯てへの旅の水平方向の移動のイメージが統合されることとなる。この、高みにある他界とこの世の涯てにある他界とのイメージの交叉は、ちょうど、創世記の「樂園」と最後の審判の後に開かれ空から現れるという「（天上のエルサレム（神の国）」との二つの樂園の位相を統合するものともなる。ブレンダンたちが地上の樂園の丘から天国を遠く望むのはまさにその典型的表現と思われる。これは創世記の「地上の樂園」が聖人達が最後の審判後の真の樂園入場を待ったための場所であるとするテルトゥリアヌス以来の理解（Tertullian 1931: 211）とも合致している。垂直方向と水平方向に措定された二つの樂園の位相はこのような形で統合され

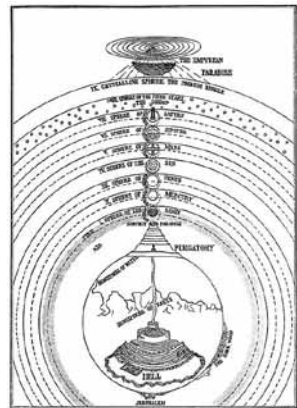


図7 ダンテの宇宙図。ミケランジェロ・カエターニの *La materia della Divina Commedia di Dante Allighieri dichiarata in VI tavole*, Monte Cassino, 1855. をわずかに改変 (Singer 1921: fig.4)。

たと見ることができる。『ナルニア国物語』でも二つの樂園の統合が物語の最終場面で描かれている。最後の戦いの後に人々が門をくぐって「さらに高く、さらにおくに」進むことで「アスランの国（地上の樂園）」と「真のナルニア（神の国）」は統合し、実現するのである。

以上に見るように、この世界では聴くことができないはずの他界の音を捉え再現する試みは、現世では決して触れ得ないはずの最善の存在（神の国・天界の整数比・真の樂園）を、この世界の最善（地上の教会・地上の整数比・地上の樂園）の内に読み取り、そこに少しでも近づき、触れ、再現しようとする営みであったといえよう。それは両者の究極の一致という同じ願望の型を持っているが、それは容易には成し遂げられないものであるからこそ意味がある。だからこそ、視覚よりも漠として捉えがたい聴覚の、「聴こえない音」へのこだわりが、古代から中世へと長く受け継がれていったと思われるのである。

## 5. 現代の臨死体験と音

体感することができない世界を表現するために物語を作り出した過去の人々の営みは、現代にはもはや継承されていないのだろうか。冒頭に触れた学生達の死後世界のイメージの単調さや茫漠感を見る限り、そのようにも思われる。この死後世界のイメージの薄さの根底には、いわゆる「死のタブー化」が進む中で生じた、自他の死に対する想像力の低下があると思われる。しかしこの想像力が失われれば、宗教や文学や芸術が繰り返す死者や死後世界を表現してきた歴史自体、理解できないものとなりかねない。それはすなわち、人間がいかなる存在であるか、考えられなくなるということと同義であると思われる。しかし現代の死後世界イメージの弱化の中でも、臨死体験の語りには、豊かなイメージと、そしてその経験を積極的に理解し伝えようとする強い熱意が見いだされる。体験のリアリティーがこのような熱意の差を生じさせていることは疑い得ない。この臨死体験者が示す死後世界を表現し伝えようとする強い熱意は、現代の人々の死に対する関心を刺激し、想像力を喚起させる力を持つものと思われる。

かつての死後世界旅行記の場合と同様に、現代の臨死体験談においても、「光」「トンネル」「花畑」「川」などの視覚的イメージがさまざまに語られる

のに比して、聴覚的イメージはあまり語られない。ただし例外も存在している。以下はともにアメリカ人の医師によって経験された死後世界の「音」の記録である。

一つは神経学者オリヴァー・サックスの『<sup>ミュージコフィリア</sup>音楽嗜好症』や、NHK スペシャル「超常現象 科学者たちの挑戦」(2014年3月22日放送)で紹介されたトニー・チコリア医師の事例である(サックス 2010: 9-25)。

1994年、チコリア医師は親族のパーティの際、外に出た時に落雷にあってしまう。体から抜け出たような意識があり、階段を登り部屋に戻り妻を見たという。妻は前かがみで子供に何かしていたが、後に確認したところ実際に妻はその時間に子供の顔にペイントしていたという。この臨死体験には純粹な恍惚感があったという。さて、この体験から甦り、生活が一見いつもどおりに戻ったところ、チコリア医師は突然ピアノ音楽を聴きたくてたまらなくなると感じた。「私は楽譜がほとんど読めなかったし、ほとんど弾けなかったけれど、独学を始めました」。そして次いで、自らの内に「天からの音楽」と呼ぶものが激しくわき出すようになったという。

……このピアノ音楽に対する突然の欲望に続いて、チコリアは頭のなかで音楽を聞くようになった。「最初は夢のなかでした、私はタキシードを着てステージにいるんです。自分が書いた曲を弾いていました。目が覚めてびっくりしましたが、音楽はまだ頭のなかにはありました。だからベッドから飛び起きて、思い出せるかぎりを書き出そうとしてみました……」。……自分自身の音楽が「わいてきて、私をとらえたんです。とても強力な存在感でした」

……「周波数か、無線帯域みたいな感じです。私が心の扉を開けば、それがやって来るんです。モーツァルトが言ったように『天から降りてくる』という感じですね」。……「私が生き延びることを許された唯一の理由は、音楽なのだと考えるようになりました」。(サックス 2010: 22-23)

臨死体験後に自身に押し寄せるピアノの旋律を探し、演奏することが生きる目的となったというチコリア医師の自己認識はひどく特異な印象を与えるものであるが、しかしこの体験を一種の召命体験とみるならば、むしろ伝統

的な宗教体験の形として理解することも可能であろう。

ハーヴァードの脳神経科医、エベン・アレグザンダー医師が経験した臨死体験はその克明な内容と、体験中のアレグザンダー医師の身体状況、特に脳の正確なモニタリングが残されたという点で特異な事例ということが出来る（アレグザンダー 2013）。

突発性の大腸菌性髄膜炎を発症し、昏睡状態になったアレグザンダー医師は昏睡から覚醒までの7日間、脳機能が大きく損なわれている状態で、不思議な世界を体験する。その世界と体験の概略は次のようなものであった。

### ①ミミズの目の世界

- ・泥のような世界。気持ちの悪い生き物がいる。
- ・上から垂れ下がる動脈のような木の根がある。
- ・無数の顔が浮かんでは消える。
- ・単調で無機質な音がしている。

この世界の音はリズムカルで重い機械的な音であり、「地底に住む巨人の鍛冶屋が遠くのどこかでハンマーを打ち下ろしているような音」と表現されている。そこに回転する光体が現れ、聴いたこともない妙なる調べが聞こえる。そこから猛烈なスピードで上昇し、次の世界へ移動する。

### ②ゲートウェイの世界

- ・青々とした田園風景を見下ろしながら飛び続ける。
- ・人々の楽しげな様子も見える。子供が輪になって歌い踊っている。
- ・多くの蝶と共に、蝶の羽に乗った美しい女性が現れ、「あなたは愛されている」、「恐れることはない」、「あなたのすることに間違いはない」、「いずれ帰ってもらうけれどいろいろなことを見せてあげる」等のメッセージを与えられる。

### ③コアの世界

- ・濃紺の世界に巨大な雲が浮かぶ。その上にたくさんの透明な光体が飛んでいる。その上から聖歌のような荘厳な大音響が鳴り響く。それは光体の歓喜の声のように感じられる。
- ・心に何か疑問を持つとすぐに答えが返ってくる世界。
- ・さらに進むと漆黒の闇であり、かつ光が満ちあふれる世界になる。
- ・「近くにいる気配のする光の球体（オーブ）」がある。胎児がブラセン

タを通じて母体につながるように、自分がオーブを介して世界とつながっている感覚を得る。

・コアの世界ではすべてのことがわかる。人間以上の知性体も含むいろいろな宇宙が存在しているが、それらすべてが愛にあふれた総体であることがわかる。

アレグザンダー医師はその後、この三つの世界を何度も往き来することになり、その過程で蝶の羽に乗る女性のメッセージを確信していくことになる。最大の知は「あなたは愛されている」ということであった。

ある時、①から②へ移動しようとしたら行けなくなっており、天国にもう入れないと思い絶望するが、これで現世に帰還することになり、7日間の昏睡から目覚める。回復した後、アレグザンダー医師はこの7日間の脳状態の記録から、自身の経験が「脳が介在しない精神活動」であったと判断し、自分が瞬時にすべてがつながり認識できる世界に入り、重要なメッセージを受け取ったのだと認識する。

アレグザンダー医師の体験は、(脳機能が回復するきわめてわずかな期間に経験されたという可能性を排除すれば、であるが、)脳機能が大きく損なわれていた状態で経験されたものということになる。さらに、「蝶の羽に乗る女性」が、医師がその存在も知らぬまま死別していた実妹であったことが後に判明するなどの不思議な事実も伴っており、この種の臨死体験談の中でもきわめて特異なものといえる。しかし、音に関してみれば、「ミミズの目の世界」と「コアの世界」の音の対照性は、本稿で概観してきた死後世界の図像や物語のものと共通している。特にミミズの目の世界できこえる「地底に住む巨人の鍛冶屋が遠くのどこかでハンマーを打ち下ろしているような音」は、「聖ブレンダンの航海」の地獄の鍛冶屋の島の音を想起させる。トゥヌグダルスが巡歴した死後世界にも死者に責め苦を与える場所の一つとして悪魔の鍛冶屋の谷が存在していた。少なくとも地獄的他界の「音」については、驚くほどの一致が見られるのである。

一方、チコリア医師とアレグザンダー医師の体験した美しい音の世界には、ピュタゴラス派の「天球の音楽」に表された壮大かつ緻密に構築された調和的世界観は感じられない。しかしそこには依然としてこの世ならぬ世界の不思議な音の体験があり、それを捉え伝えようという営みも見られるので

ある。

## おわりに——終生期に聴こえる音

本稿では死後世界の音について西欧中世の図像と物語の中の音の表現を参照し、天国的協和音と地獄的不協和音の対照的な音の表現が存在することを確認した。そこにはピュタゴラス派以来の「天球の音楽」の影響力やケルト的他界観の影響が色濃く看取されるが、現代の臨死体験の中にも同様の音の対照性が確認されるということは、この音の対照性は死後世界の音を想像する際の普遍的イメージの一つであるかもしれない。少なくとも西欧世界においては、死後世界は秩序だった美しい音が満ちる世界と、無秩序で騒々しい音が響く世界として想像されてきたのである。それは人間の死と死後に向ける希望と不安の反映とみることもできるだろう。また、地上の楽園と真の楽園の位相と両者の未来における一致の願望は、地上の教会と神の国の位相や、地上の数比関係と天界の数比関係の位相と共通であり、それは体感（表現）できないものを体感（表現）しようとする人間の強い意志と願望の顕れと考えられた。死後世界の表現に関して聴覚表現は視覚表現に比べ明らかに困難さが増す。しかしながら、聴くことができないからこそ、表現できないからこそ、そこに視覚の神聖さを優越する聴覚の神聖さが生じるとも考えられる。表現できないからこそ、その「聴こえない音」はどこまでも純化され硬度を増して結晶化する。ピュタゴラス派が世界の完全性は数（整数比）で表され、それを体現するものとして音楽を位置づけたのは、このような音の神聖さと強さのためであったかもしれない。

本稿のむすびとして、生から死へと移行していく終生期における音の強さ（力）についてささやかな考察を加えておきたい。よく知られているように臨終の際、「聴覚」は最後まで残る感覚と考えられている。人間は音とともに死の世界へ入っていくのかもしれない。

精神科医の中井久夫医師は「昏睡からのサルヴェージ作業の試み」という随筆において、身内が昏睡状態になった時に試みたことを報告している。

- (1) 視覚は意識の大きな支柱であるので、視覚への刺激を強すぎない程度とする（1時間に5分程度瞳孔に光を入れる）。



- (2) 聴覚は最後まで残っているとされるので、患者に希望を持たせる言葉をささやく。
  - (3) 昏睡患者が発語するには大きなエネルギーが必要なので、「私のいうことがわかったら二へんまばたきをして下さい」という。
  - (4) 足の裏には二足歩行のための大量かつ鋭敏なセンサーが集まっている。この敏感な足底を刺激すべくくすぐってみる。「くすぐり」は「強くて快さの混じる刺激」であり、「何か生理的な（おそらくエロスのな）意味がかくされている」。
- (中井 2008: 60-68)

中井医師が試みたように、感覚、特に聴覚が人間の主体性と社会性を最後まで保つ力になることは、十分に認識されるべきであろう。また、筆者の経験では、臨終の迫った家人の看護において、穏やかな音楽をかけることは、看護者を含む看取りの場全体を慰撫する作用を持っていた。

認知症を持つ者にとっても音楽、特に歌は大きな力を持っている。筆者の家人が入居する老人ホームには、程度は様々ながら、認知症を発症している入居者が多く存在する。しかしイベントやレクリエーションで童謡や唱歌を歌うときには、かなりの数の人が積極性を示し、合唱に加わる。重篤な意識障害の人と同じく、重度の認知症者の心象は容易には知りえない。が、音楽は明らかに特別の力を持っている。

アイルランド出身の作家で哲学者のアイリス・マードック (Iris Murdoch, 1919-1999) は晩年の9年間アルツハイマー病を発症し、最後は自分の名前さえ忘れ、オックスフォード郊外のホスピスで亡くなった。彼女の生涯については夫の英文学者ジョン・ベイリーによる詳細な回想録が公表され (Bayley 1998)、2001年にはそれに基づいた映画が作成された (リチャード・エアー監督『アイリス』)。この映画ではアイルランド民謡の *The Lark in the Clear Air* が物語の導きの糸として用いられている。彼女が若いころから、古い、アルツハイマー病を発症しても常に、歌は彼女の中にあり、彼女と世界とのチャンネルであつたと感じられる描写がなされている。実際に彼女がこの曲を愛唱していたのか、筆者には確認できなかったが、ベイリーの回想録には別の歌の記憶が語られている (Bayley 1998: Part I, chap. 6)。ベイリーは、二人の大切な音の記憶をたどる中で、二人がスコ

ティッシュやアイリッシュの歌と初期のビートルズソングを好んだこと、そして二人でいつの間にかつくったオリジナルの水鳥の歌をよく一緒に歌っていたことを語る。少なくともベイリーにおいてこの鳥の歌（それはアイルランド民謡風だったのかもしれないしそうでないかもしれないが）の記憶が妻の病と死を越える響きを持っていたことは事実であるように思われる。

国語学者の金田一春彦は『童謡・唱歌の世界』において次のように論じている。

人間に普遍的な心理として過去は一般に美化される。苦しかったことも楽しかったことになり、意地悪だった人も懐かしく感ぜられる。子どもの時の愛唱歌は、それを歌う人を子どもの頃に立ち返らせ、甘い楽しい気分にはたらせる。これは人の気分をよみがえらせ、あすへの活力のもとにもなる。愛唱歌をもつ人は幸せな人である。（金田一 2015 [1978]: 56)

人は生から死へと移行する際に大きな不安を抱える。その不安は自分が一切の社会性を奪われ完全な孤独の状態で未知の世界に向かわなければならないという恐怖でもある。おそらく重篤な認知症者も同様の不安を感じているのではないかと思われる。このような孤独を想像し、傍らで支えることが今後の医療と介護の目標の一つになると考えられる（北沢 2014: 123-130）。音楽は、特に幼少期に親しんだ歌は、いつか必ずこのような不安を抱えなければならない人間を慰撫し、大きな安心を与える機能を持っているのかもしれない。昔も今も、この世にあって天上の音を聴くことは本来かなわない。しかし人はそれぞれに地上の最良の音の内に、天に至る階梯の入り口を見いだしてきた。懐かしい歌とともに、音の力に支えられながら、人は生を越えて未知の音が響く世界に進んでいくのではないだろうか。

## 参考文献

- アレグザンダー、E. 2013: 『ブルーフ・オブ・ヘヴン——脳神経外科医が見た死後の世界』 白川貴子訳、早川書房（原著：Alexander, Eben, 2012, *Proof of heaven: a neurosurgeon's journey into the afterlife*, New York, Simon & Schuster）。
- Bayley, John, 1998: *Iris: a Memoir of Iris Murdoch*, London, Duckworth.
- Barron, W. R. J. & Burgess, Glyn S. /eds. 2005: *The voyage of Saint Brendan: representative versions of the legend in English translation with indexes of themes and motifs from the stories (Exeter medieval texts and studies)*, Exeter, University of Exeter Press.
- ファーガソン、K. 2011: 『ピュタゴラスの音楽』 柴田裕之訳、白水社（原著：Ferguson, Kitty, 2008: *The music of Pythagoras : how an ancient brotherhood cracked the code of the universe and lit the path from antiquity to outer space*, New York, Bloomsbury）。
- Gardiner, E. 1989: *Visions of Heaven and Hell before Dante*, New York, Italica Press.
- ゴドウィン、J. 1990: 『星界の音楽——神話からアヴァンギャルドまで：音楽の霊的次元』 齊藤栄一訳、工作社（原著：Joscelyn Godwin, 1987, *Harmonies of Heaven and Earth: Mysticism in Music from Antiquity to the Avant-Garde*, London, Thames and Hudson）。
- 後藤丈志 2010（最終更新。発表年は不明）：「音階について」『後藤丈志ホームページ』  
<http://www.ma.noda.tus.ac.jp/u/tg/html/scale.html>（2014年12月31日アクセス）。
- 神原正明 1997: 『ヒエロニムス・ボスの図像学——阿呆と楽園に見る中世』 人文書院。
- 神原正明 2000: 『ヒエロニムス・ボスの「快楽の園」を読む』 河出書房新社。
- 金田一春彦 2015 [1978]: 『童謡・唱歌の世界』 講談社。
- 北沢裕 2007: 「異世界文学の系譜」、松村一男・山中弘編『神話と現代』、リトン 85－112 頁。
- 北沢裕 2009: 『「死後世界旅行記」の研究——西欧中世からの系譜とその普遍的機能の考察』、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程学位論文。
- 北沢裕 2014: 「死者の存在認識の考察——死生学と医療の協働にむけて」、東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報 2014 語られる生と死』 リトン 111－132 頁。
- 松村賢一 1991: 「冒険と航海の物語」中央学人文科学研究科編『ケルト伝統と民俗の想像力』 中央大学出版部、123－195 頁。

- 松村賢一 1996:「異界と海界の彼方」中央大学人文科学研究所編『ケルト生と死の変容』中央大学出版部、3-34 頁。
- 松岡利次（編訳）1999:『ケルトの聖書物語』岩波書店。
- Morgan, A. 1990: *Dante and Medieval Other World*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 盛節子 1991:『アイルランドの宗教と文化——キリスト教受容の歴史』日本基督教団出版局。
- 盛節子 1996:「アイルランド修道院文化と死生観」、中央大学人文科学研究所編『ケルト生と死の変容』中央大学出版部、35-110 頁。
- 中井久夫 2008:『臨床瑣談』みすず書房。
- 小方厚 2012:「ドレミの科学（T S S 文化大学での講演概要）『広島大学マスターズ』  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/masters/TSS-gakumon-sanpo/23-11-ogata.pdf>  
 (2014 年 12 月 31 日アクセス)。
- プラトン 1976: 藤沢令夫訳『クレイトポン 国家』（プラトン全集 11）岩波書店。
- サックス、O. 2014:『音楽嗜好症——脳神経科医と音楽に憑かれた人々』大田直子訳、早川書店（原著：Sacks, Oliver, 2008: *Musophilia: tales of music and the brain*, London, Vintage Books）。
- Singer, Charles, 1917, *Studies in the History and Method of Science*, Oxford: Clarendon Press.
- 田中仁彦 1995:『ケルト神話と中世騎士物語——「他界」への旅と冒険』中央公論新社。
- Tertullian 1931: *Apology; De spectaculis* with an English translation by T. R. Glover (The Loeb classical library, 250), London, W. Heinemann.

本研究は大畠記念宗教史学研究助成基金の研究助成を受けました。記して謝意を表します。

## Experiencing the Afterlife: Describing Inaudible Sounds

by Yutaka KITAZAWA

In comparison to visual expressions describing the after-life, there are fewer descriptions of its sounds. At first this might seem to be because of a difficulty of expression, but the importance of certain tales of “sound” in the other world may arise from the very fact that it is so difficult to talk about that aspect.

In this paper, the expressions of sound in the iconography and tales of the after-life in Europe of the Middle Ages will first be considered. That will be followed by an explanation of the concept of the “music of spheres” existing since the Pythagoreans. This sound is said to be harmonious and perfect, but quite difficult to hear. Thus it is literally the “ideal” sound. This concept became the basis for a common expression of the sounds in the afterlife in the Middle Ages, contrasting the ideal sounds of heaven with real sounds from life on earth describing the cacophony of hell.

A further look will then be taken into the Celtic view of the other world, one that is deeply connected to the classification of tales of “journeys to the other world” during the Middle Ages. That examination leads to a consideration of the manner in which there was an intermingling of, on the one hand, the Pythagorean concept of a vertical heavenly scale (scale of spheres) and a rising musical scale with, on the other hand, the Celtic images of a horizontal movement of a journey to the end of this world. This overlaps with the aspiration for a “kingdom of God” that includes an earthly paradise.

In the modern age, there has not necessarily been a successful sharing and handing down of tales of the afterlife. Despite this, in some accounts of near-death experience, much like in the tales of the past, confirmation can be made of an eagerness to express the sounds of the other world that

ordinarily would be impossible to express. It is also an important fact that the power of sound holds major significance for humans in terminal care who are striving to hurdle the wall of death. It is believed that hearing is the sense that remains until the very end of a person's life. It is also clear that familiar songs from childhood fulfill a function of providing peace of mind as well as consoling people with worries.

Both in the past and today, people ordinarily are unable to hear the sounds of heaven. Nevertheless, people have been trying to hear and describe the "inaudible sounds" of ascending to heaven in the purest, most ideal sounds that they can hear in this world. People may proceed along a journey to an afterlife ringing with unknown sounds that transcend life while being supported by nostalgic songs and the power of sound.